

隨泉寺寺報

2002 年 4 月号 第380号 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺
春季永代經法座

講師 沼隈郡内海町 善正寺住職
那須 英信師

講題 「信(まこと)を知る」

先月の3月7日から11日まで京都の本願寺に行ってきました。連続研修会の中央教習というのがあって、そのお手伝いに行ってきました。5日間ほどまったく世間を離れて、仏様のみ教えのことばかり考えていました。全国から50名ぐらいの方が各地で地方連続研修というのを受講された方が集まってこられました。これが済むと御門徒の皆さんは【門徒推進員】となられるので、なかなかハードな研修です。毎朝5時半から夜は12時近くまでびっしりのスケジュールで、いささか疲れましたがとても有意義な5日間でした。特に3日目の夜に【決意表明式】というのがあって、本願寺の仏様の前で、これから【門徒推進員】としての決意を表明するのですから、なかなか大変です。何しろ仏様の前で約束するのですから、人はだませても、仏様はいつも見ておられるのですから……。しかしそれが済むと皆さん感激されて、中には涙ぐむ人もあって、私も感動しました。経歴も地位も捨てて、本当に裸になって仏様の前で自分自身を見つめるということも大切なことですね。私も30年前の【得度式】という僧侶になる儀式を思い出しました。

4月の行事予定

- 4月14日昼席午後1時より……… 春季永代經法座
- 4月14日夜席午後8時より……… 出張法座 上平原集会所
- 4月15日朝席午前10時より……… 春季永代經法座 佛婦總會
- 4月15日昼席午後 1時より……… 春季永代經法座

選択に迷うとき

自分たちが生活していくなかで、いろいろな“選択”の場面に出会います。しかし、ときには、選択に迷い、悩み、苦しむときがあるものです。

そんなときの話を、日比孝吉氏のインタビューで聞きました。日比氏は、コーヒーフレッシュの代名詞のような『スジャータ』を発売している名古屋製酪(株)の社長です。

名古屋製酪が、スジャータを発売する前、ガラスビンが重いので、紙パックに変えていこうとすると、”ツーパック”と”ピアパック”が候補にあがったそうです。ツーパックは、柔らかくて費用も安い。ピアパックは費用が高い。検討していた委員会でも、ほとんどの委員が、費用の安い“ツーパック”を支持していたそうです。ただし、ツーパックは、柔らかいため、落としたとき破れやすいという欠点があったそうです。日比氏は迷って、ある人に相談したそうです。その人は、ツーパックやピアパックがどんなものか専門的なことはわからないが、「お客さんは、どちらがいいのですか?」と聞いたそうです。日比氏は、「丈夫なピアパックを喜ぶが、会社がつぶれるかもしれない。」と答えたそうです。でも、その人は、「なら、答えは出ているではありませんか。お客さんが喜ぶ方です。」。大多数の声を押し切って、ここでは“ピアパック”を選びました。このとき、「会社が……」という判断をしていたら、今のスジャータはありません。商品を喜ぶお客さんがいて、会社を支えてくれるということを教えてくれます。選択に迷ったとき、自分のことよりも相手にとって“よい”かどうかを考えると、その判断は、よい結果を出してくれるようです。これからの生活のかなで、ちょっと思い出したい話だと思いました。

婦人部總會のお知らせ

4月15日午前10時より御法話の後門信徒会婦人部の總會を開きます。13年度の行事報告、決算並びに14年度行事予定、予算等を審議していただきます。会員の皆さんは誘い合わせてご参加ください。

初参式のご案内。

5月15日降誕会の法座の朝席のあと平成十三年生まれの子供さんの初参式を行ないます。仏様のこどもとして、すくすく育ててください。近所におられたらお誘いして下さい。

おねがい。

降誕会のお供えを四月の法座の時お願い致します。

善人も悪人も ひとしく

求道の親しい友である

九條 武子(くじょう たけこ)

1887年、京都府生まれ

『親鸞に出遭った人びと1』「九條武子」(同朋舎)より

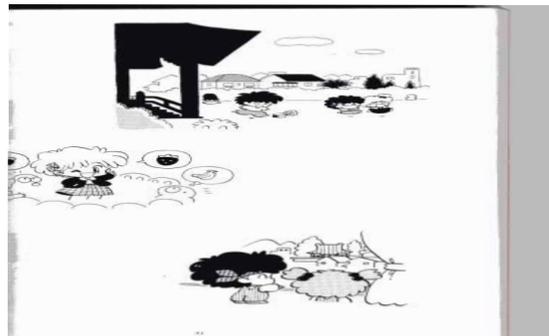
[法話] 安らかに

『日常勤行聖典(ごんぎょうせいてん)』のなかには、「さんだんのうた」、「らいはいのうた」とよばれる意識(いやく)勤行があります。この意識勤行の最初に「礼讃文(らいさんもん)」とよばれる言葉があります。紹介しますと「われ今幸いに まことのみ法(のり)を聞いて 限りなきいのちをたまわり 如来の大悲に いただかれて 安らかに日々をおくる 謹んで 深きめぐみをよるこび 尊きみ教えをいただきまつらん」というものです。

日曜学校でこのお勤めを皆でしたあと、リーダーの中学生がため息まじりに言いました。「ひとつも安らかなことはない。このあいだから自転車は盗られるし、試験の成績はよくなかったし、クラブではしごかれるし」とぼやくのです。どうやら宗教というものは、現実の苦しみやつらいことが消えてなくなり、何でも自分の思いどおりになるものと考えているようです。「安らか」とは、何事も起きないという意味でしょうか。

仏さまをものさしとして

今から四十年ほど前の本願寺から出されたもので、「世尊(せそん)を世間解(せけんげ)と申し上げます。釈尊が成仏(じょうぶつ)を宣言されたとき告げられたおことばに一切世間に於いて一切世間を離れ一切世間に住す という一偈文があ

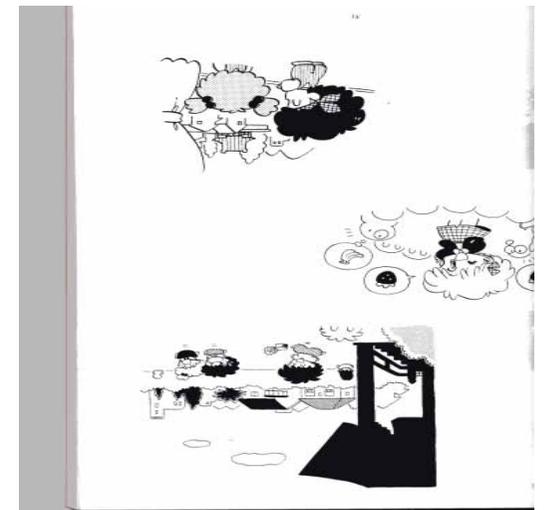


ります」と係れているリーフレットが私の手元に残っています。

釈尊がさとりをえられたということは、別天地に遊ぶことではありません。天上界にすましこんでいることでもありません。出世間という言葉误解して、仏さまを現実の生活から切り離し、遠く死んでから先の話にしてしまうのは間違いです。出世間とは世間において世間を離れることを言います。私たちは世間において世間に縛られているのです。損得、成敗、名誉や利益、人情と義理に汲々としている毎日です。釈尊は世間にあつて世間を離れ、しかも世間に安住されるといいます。

しかし、私はお釈迦さまではあません。私たちにとって「世間を離れ世間に住す」とはどのようなあり方を言うのでしょうか。

『蓮如上人御一代記聞書(れんよししょうにんごいちだいきききがき)』の中に「仏法をあるじと、世間を客人(まろうど)とせよといへり。仏法のうへよりは、世間のことは時にしたがひあひはたらくべきことなりと云々」(註釈版聖典1281頁)とあります。私たちがなすべきことは、仏法を基準として、仏さまのおこころをものさしとして、この現実社会を行きぬくことであります。信仰に入れば、自分にとって都合の悪い人や嫌いな人がいなくなるというようなものではないのです。善も悪も、善人も悪人も、念仏を味わうきっかけとみなし、仏さまのはたらきに出遭(であ)う道場として、生き抜けよと言われるのです。



武田 達城(たけだ たつじょう)
大阪・千里寺